

山崎元幹文書の意義と今後の可能性

加藤 聖文

国文学研究資料館

k.kato@nijl.ac.jp

①歴史研究の前提

歴史学は組織や人が残した記録という証拠を積み重ねてある事実を解明し、ある時代像を提示する学問である。また、Contents よりも Context を重視する。例えば一つだけの記録ではなく、その記録に関連する複数の記録を組み合わせる出来事を立体的に明らかにしようとする。また、整理された記録（例えば公刊資料）よりも整理される過程を明らかにする記録（例えば公刊資料の基礎となった情報など）を重視する。満鉄研究も刊行資料は研究の入口であって、より深く物事を解明しようとするならば、記録—いわゆる文書—を使いこなさなければならない。

②満鉄の文書はどこにあるのか？

会社が管理していた業務文書は、敗戦後にソ連軍に押収され、今は中国遼寧省档案馆に所蔵されている。満鉄研究の基本資料であるが、閲覧は容易ではない。では、研究者は基本資料を見ることなく研究をしなければならないのか？

③文書とは組織が管理するものと個人が保管するものと2種類ある

政府などが作成した公文書も民間企業が作成した企業文書も、組織が業務のなかで作成した業務文書はある意思が決定される過程の骨組み—いわば設計図—である。しかし、決定過程のなかで副次的に生成される記録—例えば、担当者の私的な意見、立案の基礎となった情報、関係者会議でのメンバーの発言、意思決定政策決定に影響を及ぼした個人的関係など—は組織には残らない。これらはそれに関わった個人が私的に作成し保管しているものである。そして、こうした本来は副次的な記録（私文書）こそが意思決定過程の肉付けとなる部分であり、歴史的に重要な意味を持つケースが多い。

④満鉄研究にとっても私文書は重要

私文書は組織文書と異なり、体系的に蓄積されるものでもなく、また個人の性格や保存環境と行った偶然性に左右される面が大きい。必ずしもすべての時代や出来事をカバーしているわけではないが、それでも満鉄関係者の私文書は多く残されており、他の国策会社に比べると記録の豊富さの点では恵まれているともいえる。特に満鉄にとってもっとも重要な出来事である満洲事変に関しては、豊富な文書が残された。

⑤山崎元幹文書の持つ重要性

満洲事変は一般的には関東軍の独走といわれているが、わずか2万そこそこの兵力しかなかった関東軍だけで何もかもできたわけではない（当然、石原莞爾一人でできるものでもない）。満洲事変のもう一つの主役は満鉄であり、実質的には事変の拡大とその後の満洲

国建国は満鉄の資金と人材のサポートがなければ不可能であったといえる。こうした事実は、残された満鉄関係者の文書（慶應大所蔵の「村上義一文書」、早稲田大所蔵の「八田嘉明文書」など）から読み取ることができる。とくに事変への直接の関与については、アジア経済研究所が所蔵する「山崎元幹文書」が多くのことを明らかにしてくれる。事変勃発と同時に各地方出先機関から本社へ次々と電報が送られ、事変の拡大の様子が手に取るように見えてくるが、それと同時に満鉄が関東軍と密接な連携を築いていたかが文書群の文脈から読み取ることができる。このような文書は他の満鉄関係者の私文書には含まれておらず、山崎文書だけの特徴である。では、なぜそのような文書が含まれていたのでしょうか？

その理由は、山崎の個人的性格というよりも、山崎が総務部次長という立場にあったことに求めることができる。総務部は組織の中核であり、会社の重要情報を集中させて組織の方向性を決定するセクションである。日本の組織の場合、実質的な立案権限は課長にあり、決定権限は部局長にあるのが一般的である。満鉄の場合、総務部長は重役である理事が兼務していたため、実質的な権限は次長にあった。満洲事変勃発という会社の緊急時には、総務部次長に情報が集中し、またこうした記録を手許に残していたことが現在の研究に繋がっている。ちなみに、組織にとってはこうした情報類は何か意思を決定する際の参考資料であって、保存対象のレベルとしては低い扱いであって、永久に保存すべき記録ではない。当時の満鉄社員は歴史家であったのではなく、自身の行動が歴史的な意味を持つと自覚していた人はほとんどいないであろう。私たちは歴史的価値で当時の記録を見がちであるが、当時その記録を作成していた人たちの目線に立てば、まったく異なる記録の価値観が存在することに気づくはずである。

⑥これからの満鉄研究

山崎文書からわかるように私文書は、その個人の組織内での役割に応じた文書が中心である。満洲事変以前、山崎は渉外課長という立場にあった。したがって、張学良政権との鉄道交渉といった渉外関係の文書が多く残されている。また、事変後に理事となるが、今度は情報類など一次記録が少なくなり、重役会議などのような組織の最高意思決定に関わる文書が中心になる。ちなみに、満鉄改組に関する記録は情報類などの一次記録であるが、これは山崎が満鉄改組という重要案件処理の責任者であったからであり、彼の役割に応じた記録が蓄積されたのである。

以上のことから整理すると、私文書は組織文書を補完またはそれ以上に重要な内容を持つ記録であるが、文書を残した人物の組織内での役割を反映したものであって、組織のすべてをカバーしているわけではなく、そこには一定の限界がある。今後の方向性としては、できる限り同時代の満鉄関係者、さらには関東軍などの関係機関に所属していた人物の私文書をできる限り洗い出すことで、より立体的な歴史像が明らかになるであろう。山崎文書はそのような私文書の重要性を私たちに気づかせてくれたという点でも貴重な記録といえよう。